

マルコ3章1-5節 「イエスの憐れみの力」

1A 敵の正しい知識 1-2

1B イエスの力

2B イエスの憐れみ

1C 最も見捨てられている人

2C 汚れを恐れず触れる(関わる)

3B 二重生活を見ている不信者

2A 明らかな真理 3-4

1B 必要を見てくださいの方 3

2B 善を行うこと 4

3A 「手を伸ばしなさい」 5

1B 不可能な命令

2B 命令への従順

1C 主と御言葉への信頼

2B 聖霊の力

本文

マルコによる福音書3章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは2章まで来ましたが、午後に3章を一節ずつ学びます。今朝は、初めの5節、1節から5節までをじっくり見て行きたいと思います。「1 イエスは再び会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。2 人々は、イエスがこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。3 イエスは、片手の萎えたその人に言われた。「真ん中に立ちなさい。」4 それから彼らに言われた。「安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。」彼らは黙っていた。5 イエスは怒って彼らを見回し、その心の頑なさや嘆き悲しみながら、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになった。」私たちは前回、イエス様の働きに対して、律法学者やパリサイ人たちがその働きを批判していたことを読みました。安息日においても、弟子たちが畑で穂を摘んで取って食べたことを、安息日に違反しているということで批判していました。

今は、敢えてイエス様が人々の前で、彼らの解釈による、安息日違反をイエス様にさせることによって試しています。安息日において、人々を治療することは労働することだ、働くことであると彼らは解釈していました。命の別状のない治療行為はしてはいけない、としていたのです。命に別条がある時は、応急手当まではやっていたいいことになっていました。事故にあつて血を流している人には、止血帯を巻くところまではやっていたいいのですが、その傷を癒すために軟膏を塗ったり、薬を飲ませるなどすることもやってはいけません。安息日が終わるまで待たなければいけませんでした。

ですから今、片手が萎えた人に対して、イエス様が安息日の会堂で、そこで教えておられる時に、彼に対して癒しの業を行えば、安息日違反だとして訴えようとしていたのです。

私たちは、福音書を学ぶにあたって、「イエス・キリストの良き知らせ、福音は反発を受ける」という現実を知ることになります。良き知らせなのであるから、良いことをイエス様が行なわれているのであるから、何も反対する必要がないはずなのですが、けれどもなぜか批判が強くなり、時にそれは誹りとなり、さらには迫害、殺害にさえ至るような恐ろしいことも起こります。私たちが福音を信じ、その中に生きると言う時も、イエス様が受けられたように反発や反対を受けることがあります。しかし、同時に、そのような反対を受けながらも、自分自身は其中で、イエス様の祝福を受けることができます。

1A 敵の正しい知識 1-2

1B イエスの力

まず、1-2 節を見てください、「1 イエスは再び会堂に入られた。そこに片手の萎えた人がいた。2 人々は、イエスがこの人を安息日に治すかどうか、じっと見ていた。イエスを訴えるためであった。」とありますが、これはとても異様なことです。と言いますのは、イエス様がこの片手の萎えた人を癒す力があることを、彼らはすでに信じているからこそ、その片手の萎えた人を連れて来た、ということです。イエス様に敵対する者が、すでにイエスにある力を知っているということです。これって、すごいことだと思いませんか？すでに、イエス様をそういった意味で受け入れているのに、それでも否定しかかっています。

人々が神に、イエスに反対する時に、ある意味でこういうことをしていることが多いですね。4 年前に、「神は死んだのか？」という映画がありました。娘を病気で失った大学教授が、強硬な無神論者になりました。授業中に「神は死んだ」と紙に学生たちに書かせて、提出させるのですが、独りだけそれを拒んだ人がいます。クリスチャンの学生です。それで、クリスチャンの学生が神が存在することの証明をしなければいけません。大学教授は、非常に高圧的に彼を責め立てます。彼が無神論になったのは、愛する娘を病で失ったからなのですが、それで神という存在自体に憎しみを抱いているのです。けれども、最後の最後の弁明でクリスチャン学生は、教授に次のように問うて、弁明を終わります。「なぜ、存在しないはずの神にそんなに憎しみを抱いているのですか？」そうです、憎しみがあるということは、その対象が存在するからこそ憎しめるのです。彼の神に対する憎しみがむしろ、神が存在し、神が何でもすることのできる全能の力があることを認めていたのでした。

思えば、宗教指導者たちは、マタイによる福音書 27 章によれば、イエス様が墓の葬られた後、その墓から弟子たちがイエスの遺体を盗むかもしれないから番兵を置いてほしいと、ピラトに要求しました。弟子たちは、イエスが甦ることを全く耳に入れていなかったのに、敵である彼らのほうがしっかりと覚えていたのです。敵の反対の中に、真実が明らかになるという皮肉です。そしてイエ

スを信じているはずの弟子たちの方に、真実が隠されていたという皮肉です。

2B イエスの憐れみ

1C 最も見捨てられている人

そしてもう一つは、イエス様が、憐れみを持っているということも知っているのです。会堂に、片手の萎えた人がいたら、必ずそういう人のところに近づき、慈善行為をするだろうということを彼らは知っていました。最も必要のある人にイエス様が、目が行くことも彼らは知っていたのです。だから、魚のいる池に、餌をつけて釣りを垂らすかのように、片手の萎えた人をここに連れて来たのです。金のある人、あるいは容姿の優れた人に親切にするとか、どうしても人はそういった人々に関心が移ってしまいますが、イエス様は真逆の関心を持っておられました。最も必要を覚えている人のところに行かれました。ご自身のことを、医者に例えられましたが、医者が数多くの人々が負傷した現場にいたら、まずは重病患者から手当てを始めます。イエス様は、そのような方です。最も人々から関心を持たれないような人のところに、むしろ関心を持たれます。

そしてすごいのは、再び、パリサイ人たちがその憐れみを知っていた、認めていたということです。敵でさえが、いいえ、敵対したからこそ、自分たちが気づかないうちにイエスが神の憐れみを持っておられることを自ら証言していたのです。

私たち教会は、このようにして集まっています。その時に、もしかしたらこう、感じるかもしれません。「私は、神を信じている敬虔な人たちの集まりには、そう簡単に仲間入りすることはできない。なぜなら、自分にはこういった負い目を持っていて、到底、ここでは明かすことのできないものだ。ここにいるには、最もふさわしくないのかもしれない。」はい、普通の人々の集まりであれば、もしかしたらそうかのかもかもしれません。けれども、イエス様が真ん中におられるのであれば、話は違います。その逆です。その負い目があって、ここには最もふさわしくないと思っている時、そこに一番、イエス様は関心を持たれているからです。

2C 汚れを恐れず触れる(関わる)

そして、この片手の萎えた人ではありませんが、らい病人のところ近づき、彼に触れてくださいました。これも憐れみの業ですね。本来なら、人々から引き離されなければいけない人にこそ、主が近づいてくださり、近づいただけでなく触れてくださいます。私たちが、人々には決して触れさせなかったところ、自分自身を引き離していたところ、それは罪深い部分でしょう、そこをイエス様の優しい御手で触れていただくことができるかどうか？であります。

3B 二重生活を見ている不信者

ということで、実はイエス様に反対するような敵は、イエス様の力やご性質、その働きについて、むしろそれを認めていながら否定しているという矛盾に気づくのです。そしてそれを裏返しますと、神やイエス様を信じないと言っている人たちの方が、かえって神の真実を知っているからこそ、そ

れを受け入れられないとして、信じていないことさえあります。

無神論者の人が、こんなことを言っていました。彼は、クリスチャンの人に自分が無神論者だと言いました。するとそのクリスチャンは、何も言わずににこりとしていました。彼は、その態度がかえってクリスチャンの信仰を疑う理由となっているそうです。聖書には、はっきりと天国と地獄のことが書いてあります。もし、それを本当に信じているのなら、自分のことを愛してくれているのなら、天国に行けるように必死になってイエス・キリストを伝えてくれるはずだと言うのです。もし、トラックが走って来て、それにひかれそうになっているのなら、「危ない！」と叫ぶことがその人を愛していることになるでしょう？こんなことを言っていました。¹

神を信じていない人たちのほうが、キリストを知らない人たちのほうが、実は信じていると言っている人たちが気づかないことに気づくことが、このようにあります。私たちの言行不一致について、彼らの方が敏感に気づいていることが多いのです。

2A 明らかな真理 3-4

1B 必要を見てくださいの方 3

そして 3 節を見てください、「**イエスは、片手の萎えたその人に言われた。「真ん中に立ちなさい。」**」イエス様は、人々がどうするのだろうか？と思ったままにすることはありませんでした。安息日の言い伝えに明らかに反することについて、どうするのか？と思ったことでしょう。けれども、イエス様は、「**真ん中に立ちなさい。**」と言われました。周りの人々がどう思おうとも、イエス様は人々の見ている前でも、しなければいけないことを行われたのです。その人の必要としているものを満たすべく、そのまま動かれています。

イエス様はそのまま、対処してくださいます。自分の罪や罪深さ、負い目に、そのまま真っ直ぐに対処してくださいます。人々の目を気にされることはありません。

2B 善を行うこと 4

そして 4 節でこう言われています。「**安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。**」イエス様は、とても明らかな真理を語っておられます。安息日に律法にかなっているのは、善を行うことです。神は善であられ、神を敬うのであれば善を行います。そこで、命を救うことは善いことでもあります。殺すことは悪いことでもあります。命を救うのは善いことだから、命を救うのです。彼らの解釈では、安息日において最低限でも救命措置は許すとしたのは、善いことだからです。では、片手を直すことが善いことではないのですか？と問われています。命を救うという慈善行為と、病を治すという慈善行為にどうして、区別を付けるのですか？ということです。

¹ <https://youtu.be/Zwm7EwijOY4>

そこで「**彼らは黙っていた。**」と言っています。もうこれほど、明らかなことはないからです。律法にかなっていることは明らかなのです。けれども、確かにその通りですと言って、思いを変えることはありませんでした。それなので、ただ黙っているだけなのです。

3A 「手を伸ばしなさい」 5

そして、「**イエスは怒って彼らを見回し、その心の頑なさを嘆き悲しみながら**」とあります。人が癒されるということは、善であります。そして、その福音を人々が共有できることが喜びであります。教会において、「1コリ 12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」とあるのです。であるにも関わらず、それに素直に喜ぶことをしない。共に喜ばないということ、その心の頑なさにイエス様は怒りを覚えられました。これからイエス様は、いろいろな人を癒され、また悪霊からの束縛から解放されます。その時に、人々は解放されるよりも、治っているよりも、元のほうがよいのです。福音に対して敵対するのは、この喜ばしい知らせを共にすることを拒むことです。それは、自己中心的な思いからでしょう。自分が他の人よりも上に立ちたいと思っているからでしょうか。あるいは、自分から他の人へ注目が寄せられるからでしょうか？いずれにしても、共有するということは、そこに自分自身を求めることができなくさせます。けれども、共に喜び、共に苦しむことはキリストにあって、真実な満足があります。片手が直されることに対して、喜ぶことはできない彼らの頑なさを嘆いておられます。

そして、イエス様が怒れることにも注目したほうがいいですね。聖書では、イエス様はどういったところで怒られるのか？私たちが考えることとは違います。それは、神を敬っているとしていながら、それとは真っ向から違うことをしている時、つまり宗教的な偽善に対して怒りを抱かれます。宮清めの時が、イエス様が怒られたまた別の時です。神を礼拝し、神に祈るべきところにおいて、そこを商売の場所、しかも不正な利益を得る場所にしていたのです。人々が最も弱くされているところ、神を求めるという、超個人的、私的な領域、自分が最も脆くされているところに、そこに人がつまずきを与えている時に、最も怒っているのはイエスご自身なのです。

1B 不可能な命令

そしてイエス様は命令されます。「**手を伸ばしなさい**」不可能な命令ですね。ここにおいて、いくらでも、この命令に対して従わない言い訳を言うことはできます。私は長いこと、こんな状態だったのですと言うことができたでしょう。お医者さんにかかっても、決して治りませんでしたと言うことができたでしょう。これまでどれだけ伸ばそうと思った事か、それでも何回やってもだめだったという事もできたでしょう。私たちは、そういった不可能に見える神の命令に取り囲まれていませんか？敵を愛しなさい、ということであるとか、心を清くしなさい、ということであるとか、福音を伝えなさいということであるとか。いろいろな命令が自分の前に置かれて、それでできない！と叫びたくなるようなことがあるでしょう。

そして事実、それは自分の力では不可能なのです。片手を伸ばそうとしても萎えているのです

から、不可能であると同じように、主からの命令は自分の力で守り行なうことは不可能なのです。

2B 命令への従順

1C 主と御言葉への信頼

しかし、「**彼が手を伸ばすと**」とあります。彼は手を伸ばしてみたのです。イエス様の命令に従順になったのです。神の命令への従順は、自分が行なうことを意味しません。それは自分の行う力ではなく、「おことばですから」ということで、信頼することです。行いではなく信じること、行いではなく信頼しているかどうか？ということ。イエス様に対して、ペテロが、漁の網を下ろしなさいと命じられた時に、「私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですの
で、網を下ろしてみましょう。(ルカ 5:5)」自分には全くできないことは、はっきりしている。けれども、あなたがそう言われるのだからという理由だけで、やってみるのです。

2B 聖霊の力

すると、「**手は元どおりになった**」とあります！そうです、主の命令は自分の力では全く守ることはできません。けれども、この方を信じて従おうとする時に、主は、その命令を従うことのできる力をその時に与えてくださるのです。ここが大事です。自分の力ではなく、神の御霊の力です。これで、聖書に書かれている、「神の命令は重荷とはならない」という言葉が理解できるでしょう。なぜなら、命令に聞き従うことは、自分の力での行いではなく、あくまでも信頼です。そして信頼して従えば、従う力を神の御霊が与えてくださるのです。片手が萎えているというのが治るのは、それは奇蹟で目に見えることができるかもしれませんが、目に見えないことも、例えば相手を赦すということ、またどうしようもない制御できない感情をコントロールすること、やめられない悪習慣をやめること。いろんなところに当てはめることができるでしょう。

モーセのことを思い出してください。彼はいろいろな、人間的には理不尽な命令を神から受けました。例えば、荒野の旅を導いている時に、たどり着いたところの水が苦かったのです。それで、民が不平を鳴らしましたが、主が一本の木の枝を示されました。それを水に投げろということ。モーセは、ただ主を信頼するしかありません。木の枝が何か役に立つのか？ということ。けれども主がその水を癒されたのです。甘くなりました。そして主はこう言われました、「出 15:26 もし、あなたの神、主の御声にあなたが確かに聞き従い、主の目にかなうことを行い、また、その命令に耳を傾け、その掟をことごとく守るなら、わたしがエジプトで下したような病気は何一つあなたの上で下さない。」主は、水をきれいにして命じておられませんでした。枝を水に投げ入れなさいと命じられました。私たちは、主の命令を聞く時に、主の行われることを自分で行わないといけないと勘違いして、それで命令を行うのを拒むことがありますか？そうではなく、ただ命令を行えばよいのです、そして神が後はご自分のことをしてください。御霊の力があるのだということ、そして主が事を運んでくださるのだということ。私たちは主を信じて、信じて、忍耐して信じて、それで言われたことを行っていくこと。御霊が必ず、働いてくださいます。